

考えることを楽しみ，すすんで表現する子どもの育成

～新聞活用に着目した，思考力・表現力を高める指導のあり方～

津南町立津南小学校

1 学校の概要

津南小学校は，平成 27 年度に外丸，中津，津南の 3 小学校が統合し，新たなスタートを切った現在児童数 301 人の学校である。

津南町は，隣の長野県栄村とともに，平成 26 年 12 月に「苗場山麓ジオパーク」として日本ジオパークに認定された。豊かな自然や人・ものを活用し，「津南に学び，津南に返す」を合言葉に，さまざまな教育活動を進め，キャリア教育の視点を大切にしながら，「津南大好き子」の育成に取り組んでいる。

特に，総合的な学習では，「苗場山麓ジオパーク」における，「ジオ」「エコ」「カルチャー」の素材を教材化して，子どもたちがつくり，発信する活動を展開している。今年度の 3 年生は，ジオサイトめぐりをして見つけた魅力を絵本にして，町内の保育園を訪問し，園児に読み聞かせをした。4 年生は，津南町や秋山郷の「温泉」を調査し，魅力を伝える動画や P R ソングを作成し，町へ発信した。5 年生は，育てたコシヒカリと町の郷土料理を組み合わせ，地元の方とともに「ジオパク弁当」を考案し，販売することを通して津南の魅力を伝えた。6 年生は，古くから伝わる「善光寺街道」を調査し，学んだことを生かして「善光寺街道ツアー」を企画し，集まった地元の方々に善光寺街道の魅力を教えながら歩いた。

このように，地域と深く関わりながら，「津南を愛し，津南に貢献できる教育」を進めている特色ある学校である。

2 N I E 実践のねらい

(1) 研究主題の設定について

平成 26 年度，27 年度の 2 年間「かかわり合いを通して考えを深め，すすんで表現する子どもの育成」を研究主題として国語の授業研究に取り組んできた。その結果，ペアやグループなど，仲間とかかわり，対話することで自分の考えを再考する姿が見られるようになってきた。そして，国語の学習の中で自分の思いや考えを進んで表現しようとする子どもが増えた。子どものアンケート結果や国語の C R T 学力検査の「話すこと・聞くこと」「書くこと」の値にも大きな向上が見られた。子どもが「かかわり合うこと」によって，考えを深め，すすんで表現する姿が見られるようになった。

ただし，結果として現れる「表現」の姿に重点を置いたため，表現することの内側にある子どもの思考場面における具体的な指導や手立てについては，あまり明らかにすることはできなかった。「かかわり合うこと」だけにとどまらず，子どもの主体的な思考を促すための指導のあり方を探っていく必要が出てきた。昨年度の授業の中でも，子どもは，仲間とのかかわり等を通して，思考し，表現する姿を見せていた。しかし，表現に至るまでの思考場面において，かかわり合い以外の手立て（発問や教材の提示の仕方等）を講じて

いくことで、より一層の思考力、表現力を高めていけるのではないかと考えた。

そこで、今年度は「表現力」に加え、その表現に至るまでの「思考力」にも着目し、思考力、表現力を高めるにはどのように指導していけばよいのか、指導のあり方を検証していきたいと考えた。

「子ども自ら考えてみたいと動き出す姿＝考えることを楽しむ姿」と捉え、研究を進めていく。また、今年度は、研究教科を「国語」に限らず、教師一人一人の専門分野を発揮しながら、広く「思考力」「表現力」を高める指導のあり方を全体で共有していきたいと考える。

(2) N I E実践のねらい

昨年度の全国学力学習状況調査の結果を見ると、子どもにとって「新聞」は身近にあるものでありながら、「新聞を読んでいる」と答える子どもは全国や県に比べ、低い値を示した。各学年のWeb診断問題でも、新聞にかかわる問題の正答率が低い傾向にあった。子ども自身が新聞のもつ情報源としての価値や魅力を十分に見出せていないことがうかがえる。

そこで、実践委嘱校となる今年度と来年度は、思考力、表現力を高める手立ての一つとして、「新聞活用」に着目して実践を重ね、その指導のあり方を探っていきたい。新聞は、多くの教材的要素（文章・写真・図・グラフ等）をもっており、教科を問わずさまざまな活用が考えられる。また、活用を図ることで、教室での学びと社会の出来事をつなぎ、学びを広げ、より深いものにすることが期待できる。また、新聞のもつ楽しさなどを実感させられる指導について共有し、子どもにとって新聞を身近にしていきたい。

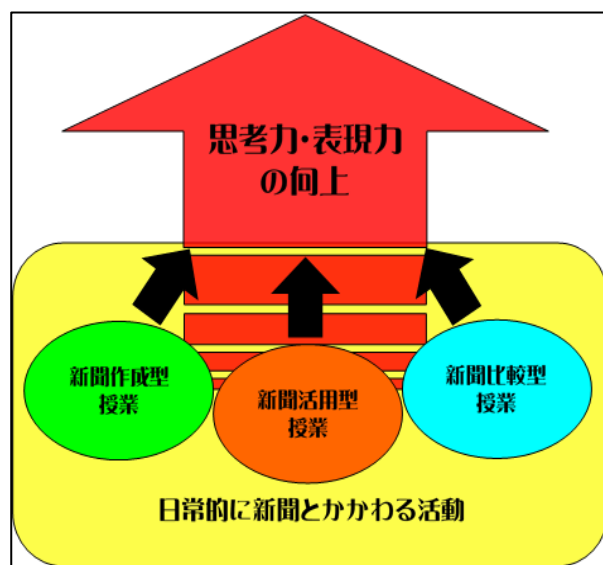
3 本年度実践の概要

新聞活用を当校の研究主題に迫る手立ての一つとして位置付け、次の3つの点から取組を進めていった。

(1) 新聞を活用した授業実践

全授業者が実践の重点教科を定め、一年間実践を行った。必ず、授業公開（全体または学年部）を行い、その指導のあり方を検証した。授業実践における新聞活用は、夏期休業中に行った実践事例研修で紹介いただいた先進校の糸魚川東小学校の分類型を参考にした。型の分類は、図1に示した3つの型である。表現活動として、新聞を作成する学習を「新聞作成型」、新聞の記事を資料として活用する学習を「新聞活用型」、複数の新聞を比較する中で、伝わりやすい記事の書き方を学んだり、考えを深めたりする学習を「新聞比較型」とした。

以下は、新聞活用の授業公開を行った学年学級と教科・単元名および新聞活用の型の一例である。



【図1 3つの新聞活用の型】

学級	教科	単元名	新聞活用の型
1年1組	国語	「かたかなマスターになろう」	新聞活用型
1年2組	国語	「しりたい！はなしたい！みんなのたからもの」	新聞作成型
2年1組	国語	「わたしは新聞記者！ほうこくします！わたしの地区の行事」	新聞比較型・作成型
2年2組	国語	「ヤマタノオロチ～登場人物にインタビューしよう～」	新聞作成型
3年1組	算数	「大きい数」	新聞活用型
3年2組	算数	「かけ算」	新聞活用型
4年1組	社会	「わたしたちの新潟県～ゆるキャラのひみつを探れ！～」	新聞活用型
4年2組	国語・総合	「作ろう！伝えよう！つなん温泉 PR 新聞」	新聞比較型・作成型
5年1組	国語	「根拠をもとに意見文を書こう」	新聞活用型
5年2組	道徳・国語	「ペットの命について考えよう」「表やグラフをつかって表そう」	新聞活用型
6年1組	社会	「新しい時代の幕開け」	新聞活用型
6年2組	社会	「新しい時代の幕開け」	新聞活用型

級外職員も積極的に新聞活用実践を行い、国語だけでなく、社会や算数、家庭科や音楽等、さまざまな教科で新聞活用が可能であることが明らかになった。また、活用の型を組み合わせることで、より思考力・表現力を高める実践につながった。

(2) 新聞を身近にする取組

子どもが身近に新聞を読む環境をつくるため、次のような取組を進めた。

- ① 週1回朝活動の「N I Eタイム」実施：「読売ワークシート通信」の活用
- ② 各教室の「ふむふむボックス」設置と「ふむふむ」掲示
- ③ 児童玄関前の子ども向け新聞・地元新聞の掲示
- ④ 委員会活動とタイアップした活動（昼の放送のおすすめ新聞記事・図書室前掲示板の注目新聞記事特集等）

※子どもの新聞を読む意識の変容については、前期と後期でアンケートを実施した。

(3) N I Eにかかわる研修の実施と新聞活用をしやすい環境整備

- ① 実践事例研修の実施（夏季休業） 講師：糸魚川東小学校 川合紀子教諭
- ② N I E教材づくり研修の実施（夏季休業）
- ③ 「読売ワークシート通信」の回覧とファイリング
- ④ 「ふむふむダイジェスト」のファイリングボックスの設置と新聞ストック棚の設置

4 実践例

(1) 「新聞作成型」の授業実践 1年国語

① 単元名「しりたい！はなしたい！みんなのたからもの

～きらめきっこきしゃつうしん～

② 実践の概要と新聞活用の視点

本単元では、発表メモ（短冊）作成時や発表時など、お互いの宝物について話したり質問したりする活動を展開し、「話すこと」では、相手によく伝わるように内容や順序を考えて話す子どもを目指した。「聞くこと」では、尋ねたいことを、興味をもって質問できる子どもを目指した。

本単元における新聞活用は、「新聞作成型」である。新聞には、離れた友達に伝えたいことが一目で分かり、形に残るというよさがある。新聞を作成することで、町の集合学習で一緒に学習した芦ヶ崎小学校と上郷小学校の友達や津南小学校の子ども、保護者等いろいろな人に自分の思いを伝えることに活用できると考えた。

本単元では、発表メモを短冊として貼り付け、見出し・写真それぞれを統合したものを「短冊新聞」とする。発表メモを短冊の形にすることで、内容を増やしたり減らしたり、順序を変えたりすることが容易になる。内容や順序を考えて貼った短冊新聞をそのまま発表原稿として活用できること、新聞の形になることで楽しみながら発表原稿作りができることから、「話す・聞く」単元においても新聞作成が有効であると考えた。

③ 指導の実際

実際、子どもたちが宝物のことを伝えたい相手は家族や友達が多かった。今回は遠くの人へ伝えたい、というところから新聞に繋がったため、同じ町内にある芦ヶ崎小と上郷小の友達に届けることにしたが、子どもたちの思いのとおり近くの人に新聞で伝えるということでもよかった。「話す・聞く」の単元であるため、新聞を作ることが「話す・聞く」の力に繋がられるのか悩んだが、単元を通しての「宝物新聞作り」には大変興味をもって取り組んだ。発表原稿代わりの「短冊新聞」は、写真付きでとても分かりやすいものになり、話したり聞いたりすることに大いに役立った。宝物の実物を手にすると、注意がそれてしまいがちな実態から、写真中心の活動にしたが、学級の実態に合っていた。



【発表原稿として活用した短冊新聞】

(2) 「新聞活用型」の授業実践 6年社会

① 単元名「新しい時代の幕開け」

② 実践の概要と新聞活用の視点

本単元では、「資料から読み取る」「読み取った内容から自分の考えをまとめる」という力を高めることをねらった。本時では、明治政府が西洋に追いつけるような国づくりを目指したことを、新聞や資料から読み取る活動を設定した。

本単元での新聞活用は「新聞活用型」である。明治政府が進めた富国の国づくりについて調べ、それによって政府が何を目指したのかを考えるための資料として記事を扱う。富岡製糸場は世界遺産に登録されたこともあり、書籍や新聞記事等の資料が豊富である。「週刊ふむふむ」の記事では、教科書や資料集にはない情報を得ることがで



2014年6月10日 新潟日報「週刊ふむふむ」

き、子どもを対象として書かれているため、読むことに課題がある子どもも読みやすい文章になっている。

③ 指導の実際

「週刊ふむふむ」の資料は、本時の課題「明治政府はなぜ富岡製糸場をつくったのか」「なぜ生糸なのか」を解決していくために提示した。新聞には富岡製糸場が、「西洋に追いつき、日本を豊かにする」という目的で建築されたことが記載されている。この新聞を読むことで、読み取りが苦手な子どもも、課題に対する自分なりの答えをもつことができた。子どもたちは、資料をよく読み、本時の課題に対して、資料から抜き出すことはできていた。しかし、それをもとに自分なりの答えを導き出す点では、まだ弱かった。

新聞活用は、課題解決の手立てとして有効であったのだが、それをもとに子どもなりの考えをつくる活動が十分でなかったことが反省点である。この考えをつくる時間や意見を共有する活動があれば、より深く政府が考えた富国強兵の政策について考えを深めることができたのではないかと考える。



【新聞記事を読み、課題について考える】

(3)「新聞比較型」＋「新聞作成型」の授業実践 4年国語・総合

① 単元名「作ろう！伝えよう！つなん温泉PR新聞」

② 実践の概要と新聞活用の視点

4年生の総合的な学習では「めざせ！温泉ソムリエ！つなん☆温泉調査隊」を年間テーマとし、津南町の温泉について調査している。そこで、単元を貫く言語活動として、地域の方に地元の温泉の魅力を伝えるPR新聞を作り、地域に発信する活動を位置付けた。

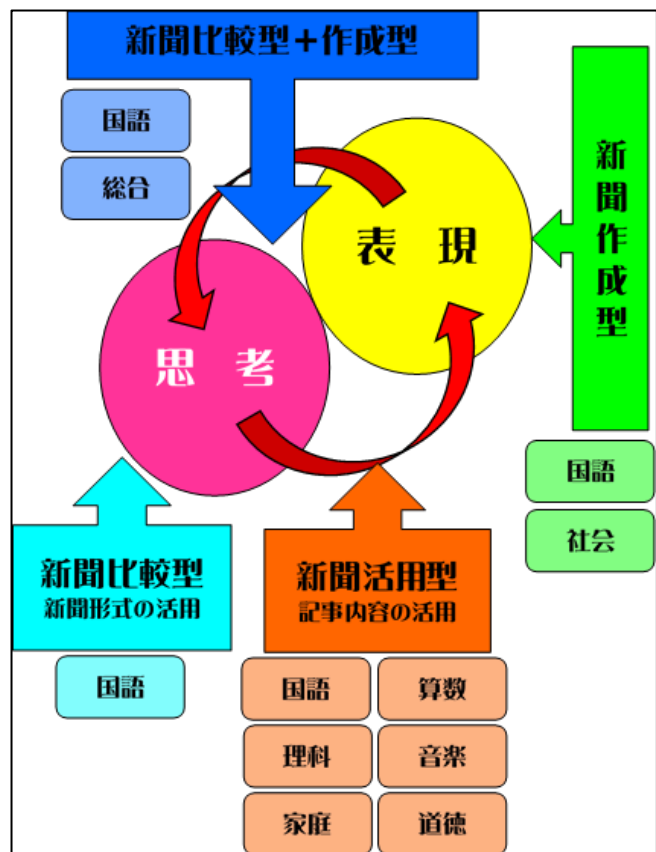
本単元の新聞活用は「新聞比較型」と「新聞作成型」の両輪の学習活動である。国語の学習で新聞を書く活動は初めてとなるため、子どもに新聞の書き方や構成する要素等について十分理解をさせた上で、記事を書く活動に入らせたいと考えた。そこで、新聞を作成する前に新聞の書き方について詳しく学ぶ活動を設定した。構成や書き方のポイントを教科書だけでなく、実際の新聞の一部を加工して作成した4種の新聞を比較する活動である。



思考力・表現力の向上に向けた、新聞活用の授業実践が重ねられ、国語の教科だけにとどまらず、さまざまな教科での活用が可能であることが明らかになった。また、これらの新聞活用実践は、「新聞作成型」「新聞活用型」「新聞比較型」に分類でき、それぞれ、思考力を高める指導に有効なもの、表現力を高める指導に有効なものが見えてきた。今年度取り組んだ、教科指導における新聞活用のあり方としては、図2のようにまとめられる。

今年度の実践の成果としては、次の3点が挙げられる。

1点目は、記事の内容を主に扱う「新聞活用型」が、多くの教科において活用でき、子どもたちが自分の考えをもったり、表現したりするための有効な材料になることが明らかになった点である。5年生の道徳と国語を組み合わせた実践の



【図2 思考力・表現力を高める新聞活用のあり方】

ように1つの新聞記事だけでなく、複数扱うことで自分の考えを深める実践もあった。

2点目は、比較型と作成型を組み合わせることにより、新聞を比較する活動を通して、新聞の形式を学び、それを生かして表現する（新聞を作成する）実践が行われたことである。単元の中で新聞活用の型を組み合わせることにより、子どもの学びに明確な目的をもたせられたり、学びに連続性をもたせたりすることができた。4年生の温泉の魅力を伝える新聞づくり実践は、この学習の成果が明確に現れていたと言える。

3点目は、新聞を子どもたちの日常に位置付けることによって、社会とのつながりを意識したり、活字を読むことに慣れたりする子どもが増えたことである。これは、授業実践というより、日常的な活動によるものが大きい。「週刊ふむふむ」を代表とする小学生向き新聞が日常にあることで、新聞を読み、社会事象を知る機会が増えたり、興味をもつようになったりした。学校評価の子どもアンケートでは、「学校や家庭で新聞を読んでいますか」という問いに対して、前期65%に比べ、後期は約77%の子どもが肯定的評価をした。子どもにとって、新聞が身近になってきていることが分かる。

一方、課題としては、授業実践において「新聞比較型」の実践が他の活用型に比べ難しく、少なかったこと、まだ新聞活用がされていない教科があることなどが挙げられる。今年度見えてきた課題をもとに、今後も、思考力・表現力を高める手立てとしての新聞活用の可能生を探り、津南小流の有効性を検証していきたい。